

花のいろもおよばぬものは春雨に

ぬれたる草の緑なりけり

(明治天皇 御製)

先月の二十八日に政府が主催で「主権回復・国際社会復帰を記念する式典」が天皇皇后両陛下のご臨席のもと開催された。一九五二年四月八日にサンフランシスコ講和条約が発効されて、七年に渡る占領体制から解放され、正式にアメリカ合衆国をはじめとする連合国との戦争状態が集結し、日本の主権が回復してから実に六十一年目のことであつた。

民主党政権が崩壊し、安倍首相が日本の舵取りをするようになってから、経済に加え、日本の誇りも回復すべく、一つ一つ着々に取り組まれているように感じる。今年春の靖国神社の例大祭には一六八人の国会議員が参拝し、麻生副総理をはじめ閣僚の参拝も行われた。これに対して韓国や中国は反発しているが、安倍総理はひるむ様子もなく「我が内閣の閣僚は、どんな脅しにもひるむことはない」ときっぱりはねつけた。それでいいと思う。靖国神社参拝は、韓国や中国の政治的外交カードの一つであり、安倍政権ではこの外交カードは使えないことを韓国も中国も認識すべきである。

また、安倍総理は憲法改正にも意欲的であり、国民の意識も憲法改正に向かつて徐々に高まりつつある。さらに総理には、いわゆる村山談話、河野談話そのまま継承せず自分なりの談話を発表して欲しい。そして、占領政策により我々は、日本のみを悪者に仕立て上げ、日本人から誇りを奪い、自虐的な歴史観を植え付けられたわけであり、今こそこの洗脳から目覚めるべきときである。特に先の大戦は日本の侵略戦争であり、アジアをはじめ多くの国の人々に多大なる犠牲と被害を与えたということをもう一度考え直さなければならぬ。なぜ、日本は大東亜戦争を戦わねばならなかったのかを我々自身の手でもう一度検証し直さねばならない。

そのためには、開戦の際に昭和天皇が下された「米國及び英國に對する宣戰の証書」を見直さなければならない。そこには「この戦争の目的は東アジアの安定と我が国の自存自衛の為」とはつきり述べられており、侵略戦争ではなかったことは明らかである。そして、日本は武力的戦いには敗れたが、当時西欧列強の植民地だったアジアの国々のほとんどがその後独立を果たしたことで、日本の戦争目的の一つは達せられたのである。

しかし、我が国は、非戦闘員の大量虐殺という明らかに国際法違反の二発の原子爆弾によって終戦に追い込まれた。このことは昭和天皇の終戦の証書においても「敵國は残虐なる原子爆弾を使用し、罪なき民を殺傷し、このままでは日本民族の滅亡をさらには人類文明そのものを破壊させてしまふだろう。」と述べられ、ポツダム宣言を受け入れるに至つたのだが、合衆国をはじめ連合国は今まで自分たちがしてきた侵略や犯罪行為を棚に上げ、日本を極悪非道の侵略國家に仕立てるべく東京裁判を行い、断罪した。

これにより日本人の精神を骨抜きにし、あらゆる手段を使って二度と自分たちに逆らえないような国にしていたのである。

今の私たちには想像もつかないが、日露戦争に勝利した日本はアジアの輝ける星だったのだ。有色人種でも白人に伍していけることを日本が示し、アジア人に自信とプライドを与え、自立心を芽生えさせ、それが後の独立につながつていったのだ。

「日本のお蔭でアジア諸國は全て独立した。日本というお母さんは難産して母体をそこなったが、生まれた子供はすくすくと育っている。今日、東南アジア諸國民がアメリカやイギリスと対等に話ができるのはいったい誰のお蔭であるのか。それは身を殺して仁をなした日本というお母さんがあつたためである。十二月八日は、我々にこの重大な思想を示してくれたお母さんが、一身を賭して重大な決意をされた日である。さらに八月十五日は我々の大切なお母さんが、病の床に伏した日である。我々はこの二つの日を忘れてはならない。」

これはタイ王国のククリット・プラモード元首相の言葉である。我々は病の床から起き上がったのだろうか。

行事予定

- ◎六月二日(日) 正午より 月例祭
- ◎七月七日(日) 正午より 月例祭
- ◎七月十四日(日) 正午より 御山立祈願祭
- ◎七月十九日(金)〜二十一日(日) 御嶽山登拝

※御嶽山登拝の日程等詳細につきましては、別紙をご参照下さい。

三・四月の神事

四月二十八日(日)に交通安全祈願祭を斎行いたしました。三連休の中日ということもあり、渋滞があり、三十分繰り下げての斎行となりましたが、青空の下、清々しいお祭りとなりました。皆様の交通安全を祈念しております。

